

気配と遭遇

蜂飼 耳

Clue and Encounter

Mimi HACHIKAI

Abstract

One of the most powerful passages in *Meian (Light and Dark)* is when Tsuda and Kiyoko meet each other again. Bumbling about in the corridors of a hot spring resort one evening, Tsuda hears the sound of a sliding door opening and closing somewhere upstairs, which leads to his encounter with Kiyoko. The next morning, when visiting Kiyoko's room, instead of directly seeing Kiyoko herself, Tsuda first sees the fixtures of the room such as the mirror and an oblong brazier and notices the elegance of the two cushions lying opposite each other on the floor. Kiyoko then appears from the veranda, as Tsuda is taking in the scene. The passage appears to be written in order to first provide clues about Kiyoko, before the woman herself is revealed to the reader.

はじめに

夏目漱石「明暗」は、作者の死によって中断され、未完のまま残された小説です。それゆえ、漱石最晩年の思想を反映するものとして、従来さまざまなアプローチが試みられ、多様な解釈と理解のもとに読まれてきたと思います。今回のシンポジウムでは、「明暗」全体の中からとくに注目したい箇所を、新聞連載一、二回分のかたちで選んで考えるという方法を、中島国彦先生からご提案いただきました。私は「一七六」「一八三」を選ばせていただきました。

津田と清子の再会、その経緯

一読者として、「明暗」を始めから終わりまで読むとき、もっとも印象的な箇所の一つは、津田と清子が再会する場面です。そこに至るまでの経緯について、少し触れておきたいと思います。清子を津田に紹介し、引き合わせた人物は、吉川夫人です。その夫・吉川は、津田にとって上司にあたります。その夫人が、なにかと津田の世話を焼きたがり、気に

掛け、ふさわしいと思う女性を紹介したという展開です。吉川夫人も、津田本人も、清子と津田がいずれは結婚することを信じて疑いませんでした。ところが、清子は突然、踵を返して津田のもとから去ります。そこにどういう理由があるのか、なにを考えての結果なのか、清子は一言も伝えないまま黙って去り、関という男と結婚します。津田にとって、これはまったく予期せぬ出来事、不意打ちです。

その後、津田は、吉川夫人から新たに紹介されたお延と結婚します。人目には、津田がお延をととても大事にしていると映るのですが、吉川夫人は別の見方をします。つまり、津田が胸の裡では清子との一件を引きずっているはずだと推測するのです。その影響が津田夫妻の関係と在り方にまで及んでいると見た吉川夫人は、ある日、津田との対話の中で、それらの疑惑をまとめて突きつけます。清子との破局について真正面から指摘された津田は、幾分うろたえつつ答えます。「なぜだかちっとも解らないんです。ただ不思議なんです。いくら考えても何も出て来ないんです」。それを受けて、吉川夫人は「突然関さんへ行っちゃまったのね」と応じます。吉川夫人

にとっても、津田にとっても、清子の心変わりも謎であり、傷となっています。吉川夫人は「男らしく」という言葉を使います。「未練を晴らす」という言い方もします。

どうしたらいいのかと、聞き返す津田に向かって、「あなたは馬鹿ね。そのくらいのことが解らないでどうするんです。会って訊くだけじゃありませんか」。ずいぶんストレートですが、吉川夫人はそう提案します。いま、清子は静養のため温泉場に逗留しているから、そこへ訪ねて行って、「未練の片を付けて来る」がいい、と。これは新聞連載でいうと「一三九」「一四〇」にあたります。

吉川夫人の態度はかなり強引なものに見えます。とはいえ、そもそも二人を引き合わせたのは自分だからという責任感や、清子が吉川夫人に対しても理由を告げずに津田から離れたことについて、顔を潰されたような後味の悪さを抱いていると考えれば、強引に見える態度と提案の背景は把握できるかたちで書かれています。たとえば、「一三四」に次のように書かれています。「ところがいざという間際になって、夫人の自信は見事に鼻柱を挫かれた。津田の高慢も助かるはずはなかった。夫人の自信と共に一棒に撲殺された。肝心の鳥はふいと逃げたぎり、遂に夫人の手に戻って来なかった」。

津田は、勧められるまま温泉場へ出かけます。それほど混んでいない時期ですが、滞在している客が何人かいます。津田は、清子に会うべきか、引き返したほうがよいか、会ってどうするのかと逡巡しますが、結局は温泉場に泊まり、湯に浸かり、そのどこかにいるはずの清子の気配に対して、全身の感覚を傾けるような時間を過ごすのです。

夜、湯からあがって自分の室へ戻ろうとした津田は、建物の中で道に迷います。新聞連載「一七五」ですが、廊下の鏡に映る人影が自分だと気づいてはっとする箇所があります。「彼は眼鼻立ちの整った好男子であった。顔の肌理も男としては勿体ないくらい濃かに出来上がっていた。彼はいつでもそこに自信をもっていた」。この自信がちょっと鼻につかないでもないですが、津田の性格の一端を表わしている箇所でもあります。鏡に映った像から、この自信を揺るがすような「不満足な印象」を受けたことに、津田は驚くのです。「これは自分の幽霊だ」と。温泉場の建物で迷い、自分の姿を幽霊のように感じる津田は、まるでこの箇所に描かれる水の流れ

や渦のように時間と空間が日常を離れてかたちを変えていく中に、身を置きます。

「一七六」に見える〈気配〉の描写

ここで、やっと「一七六」に入ります。津田が道を失い、迷っているその上の階で突然、音がするのです。それは「手に取るように判切はっきりしているのです。彼はすぐその確的さの度合から押して、室の距離を定める事が出来た」。場所と方向と距離がわかるほど明確に聞こえたその音は、室の障子を開け閉てする音です。この温泉場に、他に客がいることを津田はもちろん知っています。でも、この音が津田に、階上にも客がいることを始めて知らせるのです。作者は、その直後にこんな文章を置きます。「というより、彼は漸く人間の存在に気が付いた」。この「人間の存在に」という表現は、この箇所の文脈に沿って読むと多少大げさに響くのですが、じつはこの後に続く清子との遭遇の場面を暗示するかのよう働く表現だと思います。

こう続きます。「今までまるで方角違いの刺戟に気を奪られていた彼は驚ろいた。勿論その驚ろきは微弱なものであった。けれども性質からいうと、既に死んだと思ったものが急に蘇った時に感ずる驚ろきと同じであった」。あの音を立てた人は下女か客か、わからないけれど、行き会ったら方角を教えてもらおう、と津田は考えます。すると、足音が聞こえてきます。「これは女だ。しかし下女ではない。ことによると……」「不意にこう感付いた彼の前に、もしやと思ったその本人が容赦なく現われた時、今しがた受けたより何十倍か強烈な驚ろきに囚われた津田の足は立ち竦んだ」。障子を開け閉てする音と足音に続いて、突然、津田の前に出現するのは清子その人です。「明暗」の中でも、とりわけ大事な、津田と清子の再会の場面です。

二人はばったり会ってしまうのです。作者は、この箇所をとともこまやかに描いています。時計で計る時間にすれば数秒ほどの心情とその顕われを、拡大して、スローモーションのように描出します。「驚きの時、不可思議の時、疑いの時、それらを経過した後で、彼女は始めて棒立になった」。津田の目に、清子が身を硬くし、蒼白くなる様子が映ります。清子はくると後ろを向き、立ち去り、姿を消します。この場面での二人の再会は、再会といっても言葉を

交わすわけではなく、ただ互いに姿を認め合うだけで終わります。

この遭遇の場面は、何度読んでも、作者が細心の注意を払って描いていることを感じます。これは津田の側だけのことにはなるものの、感覚的な段階を踏むのです。そのように書かれています。まず道に迷う津田の耳に階上から音が届き、続いて足音が聞こえるわけです。「ひょっとすると」と津田は感じ取るのです。こうした段階を踏まえた上での清子の出現なのだとはいえると思います。

私はこれを、作者は清子の〈気配〉を描いているのだと考えました。清子の姿そのものを描く前に〈気配〉を打ち出し、津田がそこへ全身の感覚を向けざるをえないかたちになっているのです。ばったり出会って双方ともに驚いた、という内容をどのように描出するかという問題です。その経緯と場面を、どんな言葉で、何を描き、何を描かずにまとめていくのか。そう考えた場合、作者が非常に丹念に清子の〈気配〉を文章にのせていることが伝わってきます。

津田の妻・お延については、どのように描かれているのでしょうか。ここではお延と清子の比較を試みたいわけではないので、少し触れるだけにしますが、たとえば、新聞連載「一四」に、津田の帰宅の場面があります。「彼が玄関の格子へ手を掛けようとすると、格子のまだ開かない先に、障子のほうがすうと開いた。そうしてお延がいつのまにか彼の前に現われていた。彼は吃驚したように、薄化粧を施した彼女の横顔を眺めた」「彼は結婚後こんなことでよく自分の細君から驚かされた。彼女の行為は時として夫の先を越すという悪い結果を生む代りに、時としては非常に気の利いた証拠をも挙げた」。津田は、お延の性質について「眼先にちらつく洋刀の光のように眺めることがあった」と書かれています。「どこか気味の悪いという心持ちも起こった」と。

新聞連載「一八五」には、津田が露骨にお延と清子を比べる箇所がありますが、それは先の「一四」に出てくるお延の性質を、別の表現で指摘する内容でもあります。「彼女は津田に一寸の余裕も与えない女であった。その代り自分にも五分の寛ぎさえ残しておくことのできない性質に生れついていた」。だから、「津田は終始受け身の働きを余儀なくされた。そうして彼女に応戦すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さを嘗めなければならなかった」。対し、清子

はそうではない、というわけです。だからこそ、津田は清子の〈気配〉を察知する、あるいはそれを追いつめる方向へ神経を傾ける、といった描写が活きるのです。「一七六」に描かれる、感覚的な段階を踏む描写、つまり障子の音や足音、そこに立ち上がる〈気配〉を津田が追う過程こそは、津田と清子の間柄を示すものだと考えます。さらにいえば、この距離感や間柄は、清子の性質そのものだとということです。

「一八三」に見える〈気配〉の描写

新聞連載の一、二回分を選ぶということで「一七六」とともに私が選んだのは「一八三」です。思いがけず、二人が遭遇した夜は過ぎて、翌朝のことで、津田は、吉川夫人が持たせてくれた果物籃にメッセージを添え、それを清子のもとへ届けさせます。ご都合がよろしければお目にかかりたい、と申し出るので、清子は承諾し、津田は清子の室を訪ねます。この箇所も、私にとってとても印象的な場面です。なぜなら、これもまた清子をめぐる〈気配〉の描写の一例だと受け取れる箇所だからです。部屋に足を踏み入れる津田の目に映るものは、まずは清子ではないのです。部屋に置かれたさまざまな品が津田の視界に入ります。清子はその中にはいない、少なくとも姿が見えないのです。「黒柿の縁と台の付いた長方形の鏡」「横縦縞の厚い座蒲団」「桐で拵えた小型の長火鉢」「黒塗の衣桁」「異性に附着する花やかな色と手触りの滑こそうな絹の縞」「寒菊の花」などが、津田の目に映ります。

さらに、座蒲団が二つ。「濃茶に染めた縮緬のなかに、牡丹か何かの模様をたった一つ丸く白に残したその敷物は、品柄からいっても、また来客を待ち受ける準備としても、物々しいものであった」。二つ向かい合わせに敷かれた座蒲団を見て、津田は直感します。「凡てが改まっている。これが今日会う二人の間に横わる運命の距離なのだろう」。突然、津田はこの距離に気づきます。そして、清子の室を訪れた自分を「咄嗟に悔いようとした」と書かれています。

座蒲団を眺めている津田の前に、やっと清子が現われます。「縁側の隅」から現われるのです。清子がそんなところへ出て何をしていたのか、津田は理解できません。「しかし不思議な事に、この態度は、

鹿爪らしく彼の着席を待ち受ける座蒲団や、二人の間を堰くためにわざと真中に置かれたように見える角火鉢ほど彼の気色に障らなかった」。部屋に置かれた品々から受けるよそよそしい印象の方がずっと気に障る、というわけです。

なぜかといえば、清子は元来、緩慢な性質であり、それが動作に及ぶことを津田は承知しているからです。「そうしてその特色に信を置き過ぎたため、かえって裏切られた。少くとも彼はそう解釈した」と、二人の破局についての言及がありますが、いずれにしても、この場面でも、清子の〈気配〉がまずは描かれ、続いて清子その人が姿を現わす、という段階を踏む書き方になっているのです。

この点について、もう少し考えたいと思います。この場面では、清子の〈気配〉は、先に挙げたような品々、とくに「絹（の着物）」や「寒菊」などに託されています。もちろん、清子はその温泉場に逗留している客なので、先に並べた品々の多くは、清子の持ち物ではなく宿の備品でしょう。とはいえ、その室に滞在するあいだは、室の主人は清子であり、清子が使う品々だという意味で考えると、やはりそれらは清子の〈気配〉に係わる品々といえます。そうした品々の描写が、眼前にいない室の主人を浮かび上がらせる、つまりは〈気配〉を示すかたちになっているわけです。津田はここでも、清子の〈気配〉を感じながら、すぐにはその人を視界に捉えることはできません。段階・過程があり、ずれがあるのです。それだけに、作者が津田と清子の遭遇や対面を、短絡的に、あるいは短縮して描くのではなく、あくまでも細心の方法をもって、こまやかに追いかけて描出していることが伝わってきます。

もう少し引用します。「清子はただ間を外しただけではなかった。彼女は先刻津田が吉川夫人の名前で贈りものにした大きな果物籃を両手でぶら提げたまま、縁側の隅から出て来たのである」。私はこの描写の具体性に惹かれます。この具体性に、作者が力を注いでいることが感じられます。部屋を訪ねるといっても、こんにちは、いらっしやい、ご無沙汰しています、とスムーズに運ぶのではなく、まったく思いがけないかたちで清子は出現するのです。なぜか、先に届けた果物籃をぶら提げて。果物籃は、清子にとって、本来なら受け取ることを遠慮したい品なのでしょう。吉川夫人の名で津田から届けられた品だから、辞退したい気持ちがあるのでしょうか。

か。そうではないようです。

続けて引用します。「どういうつもりか、今までそれを荷厄介にしているという事自身が、津田に対しての冷淡さを示す度盛にならないのは明かであった。それからその重い物を今まで縁側の隅で持っていたとすれば無論、一旦下へ置いて更に取り上げたと解釈しても、彼女の所作は変に違なかった。少くとも不器用であった。何だか子供染みていた」。結局はそのすべてを「如何にも清子らしい」と、津田は受け取るのです。清子の性質はそういう緩慢なものだ、と。だからこそ「眼覚しい早技で取って投げられ」た、と破局のことを思い返さずにはいられないのです。繰り返しになりますが、突然立ち去られた理由がまったく理解できないのです。

この後、緊迫した対面の場面が続くこととなります。昨晚、ばったり出会ったのは、どういうことだったのか。そのとき、清子が尋常ではないほどの驚き方をした背景になにがあるのか。津田は、二人の破局やその理由と結びつけて理解したいのです。清子の側からすると、そもそも、なぜ津田がこの温泉場に来ているのかわかりません。その目には、吉川夫人から託されたという果物籃も、不可思議な贈り物と映ります。津田と清子の対話は、緊張をはらんだまま展開します。私が選んだ「一七六」「一八三」からは外れていくことになるので、このあたりで留めます。

最後に

清子が理由を伝えずに津田のもとから去ったこと、そしてその理由は、「明暗」全体を覆う謎です。もし、作者がこの作品を完成させていたらどこまで書かれたのか、ということが描かれたのか、という点を含めて、「明暗」は想像する面白さと余地を多分にもっている作品です。「明暗」の登場人物たちに関してですが、読んでいくと、〈性格〉が描写されているというよりも〈人物〉が描かれている、という印象を受けます。心理描写が多用されているのですが、それでも、総合的に見ると〈性格〉というより〈人物〉という言葉がふさわしいと思います。この点については、これ以上触れませんが、漱石の小説をめぐって考えるとき、一つの入り口になることかもしれないと思います。

まとめになりますが、今回は「明暗」について、

とくに「一七六」「一八三」を通して、清子の〈気配〉が描かれているという視点から考えました。まず〈気配〉が書かれ、その後に清子その人が出現するのです。〈気配〉があり、それに続く〈遭遇〉です。このように、こまやかに段階を踏む描き方で表わされている点に、清子という人物に関する特徴があり、また津田と清子の関係の特徴も見て取れると考えました。

いくつものアプローチを可能とする「明暗」ですが、清子に関しても従来さまざま読み方がおこなわれてきたと思います。漱石がどんな言葉を使って、どのように描いたかを、いま、改めて文章に即して見ていくとき、すでに読み尽くされたと思われる箇所からも、新鮮に受け取れる事柄が浮かび上がる可能性はあるはずです。「明暗」は、時代や読者の移り変わりとともに、別の顔を見せていく作品だと思います。